

らい 来ぶらり 39

卒論 ア・ラ・カルト ゼミ論

“言葉”にこだわる

いかなる点で卒論に苦労したか。テーマの選択、史料の収集、論理の構成、等々。様々な答えがある。私ならば、こう答える。卒論では、清書に最も苦労したと。

一般に清書こそ、卒論の作業の中で最も楽なものと考えられている。草稿をただ写すだけと言うことで。しかし清書こそ、卒論の作業の中で最も難しい。

言葉ほど厄介なものはない。自分の意識をどれだけ言葉が正確に表現し得るか。甚だ怪しい。腹の底から言いたいことが言えているのか。清書する上で絶えず注意を払った。

我々の周りには、実にもっともらしい聞えの良い言葉が氾濫している。自由、平等、平和、愛、民主主義、等。だが、これらの言葉の実体なり、本質なりが分かって使用する者は、いか程いるのか。又、所謂知識人の著作では勿体振った書き方をしたものが多い。格好良いことを言っている様で、実は何も言っていない。このような欺瞞が跋扈する中、信頼できるものは唯一つ。本気で語ってくれる文章のみ。

草稿の段階では、いくらでもでたらめなことが書ける。清書は違う。他人に見せることを前提とするから。自分の意思を、読手にどれ程伝達できるか。何よりも気をつけたい。それ故に私は唱える。清書こそ、最も困難を極めると。(史学専攻M2年 田村 航)



文献を捜して

—— 欧文文献に関する苦悩

卒論を書いている時に一番つらいのは、やけに進行の早い友人の話聞くことと、自分の作業が遅れていることを自覚することである。夏休みが過ぎる頃になると、みんなの進行度に差が歴然と現れてくる。周りの話を聞けば聞く程不安になって一喜一憂する日々が続く。特に準備が進むにつれて参考文献が集まれば集まるほど、まだ読んでいない論文を発見してショックを受けることが多くなる。しかもそれが欧文文献であったりすると、その焦りは頂点に達する。手に入れるにしても洋書は買うと高いし、注文なんかをしていたらいつ手元に届くかわかったものじゃない。さらに、それを読む作業の事を考えると時間的に全然余裕はない。

そんな時、図書館のレファレンスサービスは私にとって本当に心強い味方であった。自分の探している本がどこにあるのかを学内から他大学に至るまで調べてくれるのだ。所蔵先が確認できたら紹介状を書いてもらい所蔵

先へ早速乗り込むわけだが、他大学の場合閲覧の条件がまちまちで、複写の値段が高かったり、枚数制限がある大学もあるので注意が必要だ。

さて、文献を手に入れさえすれば、あとはその文献に取りくむばかりである。しかしここで一つ、かなり多くの人陥り易い錯覚がある。それは文献を手に入れた安心感から、もうそれを読んでしまったかのような気分になることである。語学の堪能な方は別だが、そうでない方は結局読まなかったという事態にならぬよう充分ご注意を。

(哲学専攻M1年 石神 森)

主題が招いた苦勞

——設定は慎重に

安易な主題設定は、後々の苦勞を招きます。

ぼくは不覚にも、ドイツ語と日本語の対照文法を題に選んでしまいました。確かに、対照とは、違うものを比べるのだから、問題点をはっきりさせやすく、論文の題としては一見好都合に見えます。しかし対照するということは、一つ一つの対象について論文を各々書くようなもので、対象が一つである時の二倍の労力を必要とします。たとえ一つの対象について多くの知識を持っていたとしても、比較対照を旨とする論文では、半分の意味しか持ちません。両方ともあまり得意でない時には……。

それともう一つの苦勞と遭遇しました。取り扱う主題に対して日本語の文献があまりなかったのです。日本語で読んでも時間がかかるものを、外国語で読むとなれば、もう“悲惨”の一言に尽きます。つまり主題を決定する前に、興味がある分野の資料を確認する事が得策でしょう。(資料の確認に際して、図書館の目録等が便利です。また、参考係の方もアドバイスをして下さいます。とりあえず図書館へ！)

そしてその後、主題をできるだけ絞って書き始めた方がいいのではないのでしょうか。あまり壮大な計画を立てても、それがいい加減な形、もしくは未完成に終わってしまっは、いい気持ちはしません。

皆さんも、ぼくの二の舞を演じぬよう、良い論文を書き上げて下さい。

(独文専攻M2年 高橋 純)

まとめ方が問題！

——ゼミ論・思いつくまま

先日、院の先輩が、「法科学生の論文は、いかにうまく諸先生の論文をまとめるかが問題。」と言っていたが、ゼミ論も正に同様だと思う。できる限りの資料を消化し、その上で自分の意見を形成する。紙には文献・資料を引いて見せながら、油を売らず、絞って書く。仕上りを読んで“つぎはぎだらけでみっともない。”と思えてくるかも知れないが、自分の意見を熟考して表現した事が重要。独自の意見や提案を示せなくても仕方がない。

資料の収集・消化には手間がかかる(図書館に無い資料を買ってもらったり、他大学から送ってもらうとなると優に1~2ヶ月はかかる)ので、日頃から準備してゆくののが最良。だから、何か関心事を持ち、それを題材にもってくる。そうすると、資料も集まりやすくなる。また資料を芋ズル式に集めると、容易に集まるものの次第に古くなるので、一方では雑誌・新聞・講演会等を利用した最新の情報も仕入れる。新しい情報を織り込むこと、特に足で稼いだものを入れることは、満足感を得られます。

他には、短い簡潔な文を書くとか、言い切る所は言い切って未練がましい文は書かない等をしたら、読み手は軽快に読めるでしょう。法哲学で軽快に読ませるのは、至難でしょうが。

(法学専攻M1年 儀丹伸喜)

『明治前期手書彩色關東實測圖』—第一軍管地方二万分—迅速測圖原圖覆刻版—(日本地図センター 1991年)を経済学部で購入。A3変型判地図964枚、資料編付き。フランス式の華麗な地形図。地図の周囲にはその土地の景観や建物などの風景画が美しい水彩画で描かれている。

図書館の書庫にひっそりと並べられていた『赤染衛門集』が目にとまった。奥書に「貞享5年 武陽書堂松葉清兵衛開板」とあり、300年も前に作られた版本である。今回はこの資料を取りあげてみた。

『赤染衛門集』は610余首から成る赤染衛門の私家集であり、成立年は不明。伝本は流布本系と異本系に大別され、流布本は部立はないが、歌の配列は四歌群にわかれ、各歌群は年代順に配列されている。異本系は四季・離別・行旅・哀傷・仏事・無常・雑の七部に部類されている。

両系統本とも自撰して関白頼道に献上した旨の詞書が巻末に記されているが、成立の先後関係やどちらが自撰献上本かは断定できない。現在は、流布本を先に成立した自撰献上本とし、異本はそれを精撰類纂したとみる説が一般的である。

内容は、実生活の折々に交わされた贈答

赤染衛門集



歌を主に、歌合などの晴れの歌や仏典を題にした歌などが含まれ、変化に富んだ作歌生活がうかがえる。作品は時宜を得たそつのない詠み口のものが多い。

作者の赤染衛門は生没年未詳。出生は天徳(957)～応和(964)頃で、長久2年(1041)頃に80余歳で没したと推定される。生存中から和泉式部と並び称され、『栄花物語』前編の作者としても有力視されている。

学習院所蔵本は、貞享5年(1688)版の流布本で4冊から成り、題簽には『赤染衛門家集』とある。保存の状態は比較的よいといえるが、第1冊

は題簽がはがれ、第4冊には水に濡れたような染みがある。いつ頃、どのような経路で学習院所蔵資料となったのか記録はないが、それらの汚損が本館に所蔵された後のものであるとすれば残念なことである。

請求記号は旧分類315-70で、書庫5層に収められている。(運用係 上野しのぶ)

としよかん

— 韓国と日本 —

学習院大学に入って、まもなく一年半になります。学校生活もだいたい慣れ、落ち着いて勉強できるようになりました。授業のない日には、だいたい図書館で必要な資料を探したり、東洋文化研究所で韓国関係の新聞・雑誌や文献を調べたりします。特に、東洋文化研究所は、私たちアジア系の留学生にとっては、非常に貴重なところ。私は母国のニュースや情報が得られるのでよく利用しています。

ところで、日本と韓国の図書館について、感じたことを少しお話ししたいと思います。日本にきて意外に思ったことは、図書館の閉館時間が早いということでした。韓国では、ほとんどの大学の閲覧室が朝5時から夜11時まで開いています。資料収集もしますが、普通

は勉強する空間として利用しています。日本の図書館では、閲覧室で一日中勉強をするというよりは、本を借りたり、資料を探すことが多いのではないのでしょうか。

学習院大学の図書館では、資料を探す際に、職員たちが適切なアドバイスをしてくれますので、とても助かります。先日、セミナーの準備のために古い文献を探していましたが、珍本で、十分な情報もなく、調べ方もよく分からず迷っていたところ、係の方がコンピューターですぐ調べ、他の大学に連絡して紹介状を書いてくれました。おかげでスムーズに手に入れることができ、大変感謝しています。日本の大学の図書館は韓国の大学の図書館より閉館時間は早いですが、このような点では大変便利です。こうした素晴らしい環境に恵まれ、充実した日々を送っています。

(日文専攻D1年 オム 嚴 ビルキヨ 畢嬌)

参考室あれこれ

今年も夏休み前に、「卒業論文」や「修士論文」の基礎資料を求めて、国内・国外の機関に問い合わせをしました。通信技術の発達や手段の多様化などで、資料入手は一段と楽になったといえます。特に、雑誌論文を中心に、国外に申し込むケースも増えてきています。

1876年、1905年、1921年発行の雑誌論文を外国へ依頼したところ、一ヶ月またずにコピーが次々に到着した時には感激しました。最近のものも十日かからずに到着という例もあります。『Source』という雑誌などは実に、別々に5人の利用者から調査依頼を受け、国内でこの雑誌を所蔵している

ところを特定できず、これはイギリスに複写依頼をして資料を取り寄せました。また、国内を探しに探して、最後の手段と米国の議会図書館に申し込んだ図書を、夏休みに何とか利用者の手元に届けることができ、共に喜びあいました。ちなみに、これは1934年にParisで発行された本でした！

British Library やフランスの Bibliothèque nationale は支払いがクーポン券ですむので簡単なこともあり、手軽に申し込める要因になっています。ともあれ、国外から依頼があった場合のためにも、国内の、せめて自分の大学の発行物は、きめ細かく収集し保存することが必要だと、改めて痛感します。(参考係 甲斐静子)

フレッシュな気持ちで

この春から、開架図書室のカウンターに座るようになって、早くも半年たった。朝は、モーニングコールならぬ本の返却の催促で、学生の寝込みを襲い、脅し(?)をかけているつもりが、「連絡ありがとうございます」と反対に感謝されてしまい、もう少し厳しく言う方が良いかなと思ったりもする。春には、新入生の「〇〇教室はどこ？」という質問に、マップを片手にキャンパス案内に精を出した。夏の試験期間には、開館の準備をしている背中に、玄関前の20人位の熱いまなざしを感じ、開館時刻前にカギを開けたりと、これまでにない経験をした。毎朝、図書館が開くのを外のベンチで待っているA君。週に3~4回は本を借りに来る卒業生のBさん。いつしか顔なじみになり、会えば必ずあいさつを交すCさん。本の貸出・返却の時は、いつも「ありがとうございます」というD君など、今日もまた、どんな人と会えるのかと、好奇心いっぱいカウンターに座っている。(閲覧係 小林邦子)



お知らせ

○大学祭期間中は閉館します。

10月30日(金)から11月4日(水)までの大学祭期間中は、ロビーと第1閲覧室が展示会場となりますので閉館します。

利用できませんのでご了承ください。

○コピー機が増設されました

2階目録室に設置されているコピー機、試験期には大変な混雑で、利用者のみなさんに

ご不便をおかけしておりました。

図書館では、この混雑を少しでも解消できればと、1階ロビーに1台増設いたしました。同時に両替機と券売機も設置(場所は1階階段昇り口)しましたので、合わせてご利用ください。

なお、本学所蔵の図書・雑誌以外のコピーはご遠慮願っております。

来ぶらり No.39 1992年10月1日発行

発行責任者：片瀬 潔 編集委員：石田京子 田村節子

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎03(3986)0221